

西洋音楽による平和活動の功罪

明治学院大学 国際学部
半澤 朝彦

キーワード：グローバリズム、ナショナリズム、西洋近代、アート、教育

1. はじめに

音楽「ジャンル」の問題性
政治学・平和学として = 動員とアイデンティティ、ヒエラルヒー
西洋古典（クラシック）音楽とは？
ジャズ・ロック・ヒップホップは「抵抗の音楽」か？

2. 西洋近代音楽に貫徹するもの

- (1) 音楽概念の生成
記譜法 ← デカルト座標 ※絵画の遠近法に相当
作品概念（アート）
記録、再現可能性
- (2) 「絶対音楽」 → 「サウンド主義」
構造（音域、声部、バス）
- (3) 身体性（言語）
等拍性
フレージング

3. トランスナショナルな音楽？

- (1) 多国籍性・多文化性
地中海 → 北ヨーロッパ → 北米
- (2) オリエンタリズム
ベートーヴェン、モーツァルト、サンサーンス、ヴェルディ
「リベラル・アワー」の音楽、ビートルズ、ワールドミュージック
- (3) ナショナリズム
「国民楽派」、J p o p, K p o p など
- (4) アフリカのリズム
← アングロサクソン・ユダヤ人等が摂取

4. 平和活動

- (1) サイド＝バレンボイム・プロジェクト
- (2) エル・システマ、スズキ・メソッド
- (3) カザルス、ヨーヨーマ、ボノ、ユネスコ平和芸術家 etc.

5. まとめ

音楽にはアイデンティティを育て、人間を連帯させる力があると同時に、理性を超えた「排他性」を促進する作用もある。音楽の「ジャンル」とはきわめて政治的なものであるが、人々にその認識は薄い。音楽が「世界語」であるという言説は、西洋音楽の世界支配を正当化する一種の傲慢でもある。いわゆる「(西洋)クラシック」音楽に限らず、ジャズ、ロック、ヒップホップ、ダンスミュージックであれ、一定のジャンルをなせば、それは歴史と儀式、メンバーシップを伴う「クラブ」である。そのことを自覚しない平和活動は危うい。

参考文献抄・DVD

『ラマラ・コンサート：ウエスト＝イースト＝ディヴァン・オーケストラ』ワーナーミュージック・ジャパン

エドワード・サイード（大橋洋一訳）（2001-）『文化と帝国主義（上）（下）』みすず書房

バレンボイム&サイード（中野真紀子訳）（2004）『音楽と社会』みすず書房

Bruce Johnson & Martin Cloonan（2009）, *Dark Side of the Tune: Popular Music and Violence*, Ashgate

John Street（2012）, *Politics and Music*, Polity

Jindong Cai & Sheila Meivin（2016）, *Beethoven in China*, Penguin

森正人（2008）『大衆音楽史』中公新書

福島亜紀子（2012）『紛争と文化外交』慶應大学出版会

柳沢寿男（2012）『戦場のタクト』実業之日本社

山田真一（2008）『エル・システマ：音楽で貧困を救う南米ベネズエラの社会政策』教育評論社

細田晴子（2013）『カザルスと国際政治』吉田書店

井上貴子（2008）『ビートルズと旅するインド』柘植書房新社

中町信孝（2016）『「アラブの春」と音楽』ディスクユニオン

松宮秀治（2008）『芸術崇拜の思想』白水社